

## 環境負荷低減への取り組み

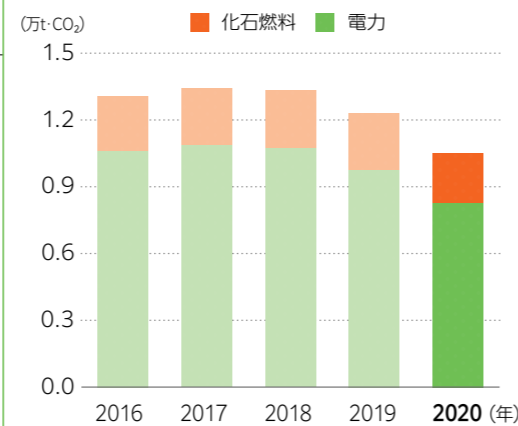
ホシザキグループは、温室効果ガスの排出抑制を自社の事業に直接的に関連する課題として認識しています。また、廃棄物排出量の低減や3R、製品のノンフロン化などに積極的に取り組んでいます。

### 地球温暖化の防止

#### CO<sub>2</sub>排出量削減に向けた取り組み

ホシザキでは、事業に伴い発生するエネルギー起源のCO<sub>2</sub>を削減するため、製造部門・間接部門ともに、省エネ設備の導入、設備の運用改善、業務の効率化などに取り組んできました。あわせて、製品の設計段階での軽量化や部品点数削減の取り組みを通じて、輸送にかかるエネルギーの削減や生産工程の改善による使用電力削減にも積極的に取り組んできました。2020年度のCO<sub>2</sub>排出量は上記取り組みに加え、新型コロナウイルス感染拡大の影響による生産量の減少もあり、10,492t-CO<sub>2</sub>(前年度比85.4%)となりました。引き続き、省エネ設備の導入や生産工程の改善などを推進し、CO<sub>2</sub>排出量の削減につとめていきます。

電力・化石燃料のCO<sub>2</sub>排出量の推移



#### 製品における省エネルギーの徹底

ホシザキでは、環境負荷の低減にむけ製品における省エネ化など環境にやさしい製品の開発を目指し、日々製品の改良に取り組んでいます。

2020年3月に販売を開始したガスブースター内蔵ドアタイプ食器洗浄機は、業界初となる食器洗浄機用小形湯沸かしユニットを機

ガスブースター内蔵ドアタイプ食器洗浄機

械室内蔵することにより、省スペースでの設置を可能にしました。さらに燃焼効率の向上により、従来に比べお湯を沸かすためのガス消費量を減らすとともに、待機時間中のすすぎ湯温維持のための燃焼を廃止することで省エネルギーを実現しています。



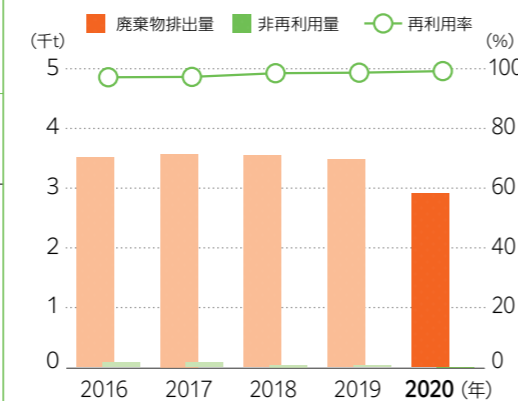
### 廃棄物の発生抑制

#### 廃棄物発生抑制に向けた取り組み

ホシザキでは、金属作業屑の歩留まり向上(1枚の金属材料から多くの部品取りをする)や、プラスチック材料作業屑の歩留まり向上、製造工程での不良削減活動、在庫管理の徹底などに取り組み、3R(Reduce・Reuse・Recycle)を積極的に実施しています。

2020年度の廃棄物発生量は上記取り組みに加え、新型コロナウイルス感染拡大の影響による生産量の減少もあり、2,891t(前年度比83.6%)となりました。また、本社工場・島根工場の再利用率については、廃棄物の分別、再利用の促進

廃棄物排出量の推移



によって99.0%以上を達成しました。引き続き、廃棄物の発生抑制を促進するとともに、再利用率の一層の向上につとめていきます。

## フロン・化学物質管理

### ノンフロン化に向けた基本的な考え方

ホシザキでは、より環境に配慮した製品をお客様にお届けするために、製品に含まれる有害物質削減に取組み、欧州RoHS指令※をはじめとする法規制に適合した製品づくりを進めるとともに、冷媒・発泡剤

のノンフロン化に取り組んでいます。

※ 国際的な環境基準で、特定有害物質(鉛、六価クロム、カドミウム、水銀、ポリ臭化ジフェニルエーテルなど(他5物質))の使用を制限するための欧州連合(EU)の指令。

### 断熱材のノンフロン化

断熱材の発泡剤として使用されるフロンについては、製品の環境性能の向上を図るうえでの課題のひとつとらえ、技術革新を進めてきました。ホシザキでは、2007年に、発泡剤にシクロペンタンを採用しノンフロン化したテーブル形冷凍冷蔵庫・ビールショーケースの生産を開始しました。2012年には、この断熱材のノンフロン化手法をタテ形冷蔵庫にも展開し、温室効果ガスの排出削減を実現しています。さらに、2020年8月には、すべての発泡剤のノンフロンへの切り替えが完了しました。



テーブル形冷凍冷蔵庫

### 冷媒のノンフロン化

欧州では、2022年に代替フロン冷媒を使用する機器の販売が禁止される(Fガス規制)など、ノンフロンへの要請が強まっています。当社では、2009年より、業務用では世界初となる自然冷媒のプロパン(R290)を用いた製氷機の製造・販売を開始し、さらなる改善を重ね、製品ラインナップの拡充につとめています。

その一例として、ホシザキヨーロッパでは2019年にはノンフロンアイスディスペンサを、2020年にはクレセントアイス製氷機を開発・発売しました。



クレセントアイス製氷機

## 水資源保護の取り組み

### 生産工程における水使用量

ホシザキの生産工程では、間接冷却など限られた用途で水を使用しています。また、各工場は湯水等のリスクが低い地域に立地しており、各地の状況に応じて水道水・工業用水・地下水を適宜使用しています。

水資源を適切に使用していくため、水資源の使用量を把握し、削減に取り組んでいます。2020年度の水使用量は生産量の減少も影響し、129千m<sup>3</sup>(前年度比96.2%)で、そのうち水道使用量は50千m<sup>3</sup>、工業用水使用量は20千m<sup>3</sup>、地下水使用量は59千m<sup>3</sup>でした。

水使用量の推移

